

(別紙)

少雨に係わる農作物等の管理について

平成26年5月14日
農業技術課

1 水稲

- ・育苗用パイプハウスやトンネルは、日中の換気に留意し、適温管理を徹底する。
- ・配水を計画的に進め、適期内に田植えを終えるようにする。
- ・ため池等で今後の水不足が予想される場合は、計画的な配水がなされるよう早めに段取りを進める。

2 麦

- ・今後、気温が高く少雨が続くようであれば、枯れ熟れにより刈取り時期が早まることも予想されるので、今後の生育状況に応じて収穫作業の準備を早める。

3 果樹

(1) かん水と土壌管理

- ・かん水可能な果樹園は、早めにかん水を行う。かん水間隔の目安は、概ね5～6日とする。
- ・全面かん水が困難な場合は、樹冠下の根域を中心に部分かん水を実施する。
- ・水分の競合を防ぐため、草生園では下草刈りを、清耕園では除草を兼ねて浅く中耕を行う。
なお、樹冠下に敷きワラ等のマルチを実施し、土壌水分の保持に努める。

(2) 苗木の管理

- ・この春に定植した苗木は、定期的な水分補給を行い、生長を助ける。また、りんご新わい化樹の若木など根域の浅い果樹類についても、優先的にかん水を行う。

(3) 生理障害対策

- ・少雨により土壌が乾燥すると、りんご・ぶどう・おうとう・あんずなどのホウ素欠乏症、りんごのカルシウム欠乏症状（コルクスポット）などの生理障害が発生しやすくなる。かん水を行うとともに、必要に応じて葉面散布を行う。

(3) 病虫害防除

- ・りんごの腐らん病、ケムシ類、ハマキムシ類の発生が多い傾向である。今後乾燥が続くと、うどんこ病、アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類などの発生も心配されるので、適期防除に努める。

(4) りんご、なし

- ・落花期は平年並みからやや遅れている。結実状況の見極めができ次第摘果作業を行う。

(5) もも

- ・落花期は平年よりも4～6日程度遅れている。肥大状況を見極めながら摘果作業をすすめ、果実肥大を促進させる。

(6) ぶどう

- ・乾燥により新梢の生育にバラツキが見られる。芽かきにより新梢の生育を揃えるなどの管理を徹底するとともに、展葉枚数などの生育状況を把握し、農薬散布や植物成長調整剤の処理等は適期に行う。なお、果樹試験場の「巨峰」開花予想(5/5 現在)では、開花始め、満開期とも平年より1日遅れとなっているので参考とする。

4 野菜

(1) かん水と土壌管理

- ・マルチ展張作業は土壌水分を確保してから行う。
- ・乾燥が続いたほ場では、短時間の降雨では土壌表面が湿る程度で生育に必要な水分が供給されないので、降雨の状況を見ながらかん水を行う。
- ・定植時に土壌が乾燥している場合は、定植時の植穴かん水や定植後株元かん水を行い、活着を促す。また、主に葉野菜類でかん水可能なほ場では、午前中を中心にスプリンクラー等でかん水を行う。
- ・水田転換畑のアスパラガス等でかん水可能なほ場では、うね間かん水等を行う。

(2) 生理障害対策

- ・ハクサイ、セルリーの心腐れ症、トマトの尻腐れ果などの生理障害が発生しやすいので、カルシウム等の含まれた微量要素肥料の葉面散布を行う。
- ・干ばつ後の降雨や高温などによって肥効が高まり、レタスのタケノコ球やタコ足球など変形球が出やすいので、むやみな追肥は行わず、適正な草勢を保つようにする。

(3) 病害虫対策

- ・乾燥状態では、アブラムシ類やハダニ類、アザミウマ類の発生が多くなるので、適期防除に努める。

5 花き

(1) かん水と土壌管理（露地花き）

- ・少雨傾向により、草丈やボリュームの不足が懸念されるので、土壌水分が不足している場合は上部かん水やうね間かん水を行う。
- ・かん水ができないほ場では、敷きわらやマルチ等を行って土壌水分の保持に努める。
- ・定植を予定しているほ場では、植え溝もしくは植穴にかん水して苗が老化しないうちに植え付けを行う。

(2) キク

- ・定植後の著しい乾燥は、活着及び生育不良の要因となるので、ほ場の状況によりかん水を行う。また、乾燥防止対策として敷きわら等を行い、土壌水分の保持に努める。なお、トンネルを除去する際には、蒸散の少ない夕方や曇天時を選んで行う。

(3) りんどう

- ・新植ほ場では、定植後の著しい乾燥により活着が遅れ生育不良となるので、上部からのかん水を行い活着を促す。
- ・据置ほ場では、土壌水分を確認し必要に応じて通路かん水を行なう。しかし、排水の悪いほ場では過剰なかん水や長時間の滞水は、根腐れを起こす原因となるので注意する。

(4) シンテッポウユリ

- ・新植ほ場では、定植後の著しい乾燥により活着が遅れ生育不良となるので、上部からのかん水を行い活着を促す。生育状況に応じて1000倍程度の液肥を施用する。

(5) 害虫防除

- ・アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ、ダニ類等の発生が、露地、施設ともに多い傾向である。害虫防除の徹底を図るとともに、ほ場周辺の雑草防除対策にも努め、害虫の飛来、侵

入防止を行う。

6 畜産（飼料作物）

（1）牧草

- ・刈り取りは10～12cmのやや高刈りとし、再生力が悪くならないようにする。
- ・水田転換畑等で、かん水が可能な飼料畑ではかん水に努める。

（2）飼料用トウモロコシ、ソルガム等

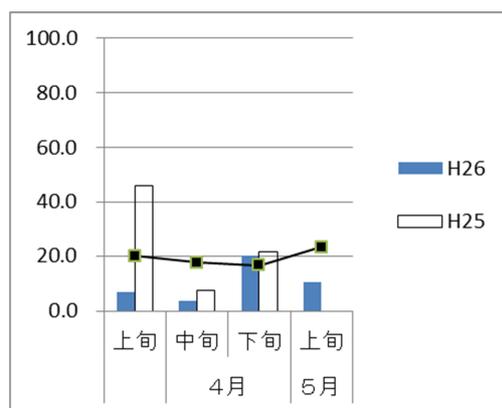
- ・既に播種したほ場では、かん水のできる圃場はかん水に努める。
- ・これから播種する場合は、通常より1cm程深くすると共に鎮圧を実施して発芽を促す。
- ・除草剤（土壌処理剤）の施用は、土壌水分を確保してから散布するか、希釈水量を多めにする。

《参考》平成26年4月～5月の降水量の推移

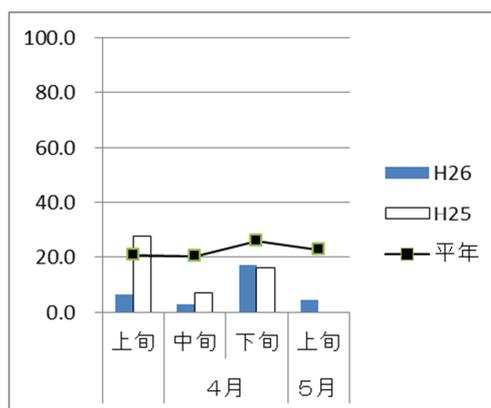
気象庁アメダスデータ

		長野			上田			松本			飯田		
		H26	H25	平年	H26	H25	平年	H26	H25	平年	H26	H25	平年
4月	上旬	7.0	46.0	19.9	6.5	27.5	20.7	7.0	62.0	26.2	27.5	95.5	44.9
	中旬	3.5	7.5	17.5	3.0	7.0	20.3	2.5	11.5	27.5	4.0	7.5	46.2
	下旬	20.0	21.5	16.6	17.0	16.0	25.8	32.0	14.5	21.6	52.5	66.5	36.3
5月	上旬	10.5	0.0	23.2	4.5	0.0	22.6	4.5	0.0	27.5	12.0	4.0	50.1
合計		41.0	75.0	77.2	31.0	50.5	89.4	46.0	88.0	102.8	96.0	173.5	177.5

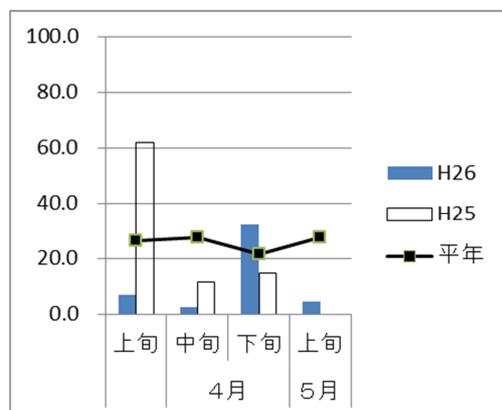
長野



上田



松本



飯田

